



インタビュー 立野純三ガバナーに聞く

第2660地区のガバナー（2015—16）である立野純三さんは、建築の世界では欠かすことのできない商品を展開している株式会社ユニオンの社長として経営手腕を発揮しておられます。ロータリーだけでなく大阪JC（大阪青年会議所）など若かりし頃から団体活動にも熱心に取り組み、経営者として社会に奉仕する模範を我々に示してられました。

そんな立野ガバナーに、企業経営や社会貢献に対する思いを中心にインタビューしました（聞き手・佐野吉彦）。

【佐野】

立野ガバナーは、ラビンドランRI会長の方針に基づいて第2660地区の方針を立てられました。

【立野】

地区のピークは1996年ころで、メンバー数は5700人を超えていたのですが、この20年で2000人以上減って3600人ほどになっています。一方で委員会はその頃と同じように活動しているため毎年赤字を出しているわけですが、いち経営者として考えると、このことは不思議に思う。各委員会の事業が今の情勢に合っているかを見極め、まずは単年度黒字を実現したい。また8組あるIMも数のバランスが悪くなっているの、体制の見直しも考えています。全てがすぐ変わる事はありませんが、少なくともそのきっかけは作りたいと思っています。

【佐野】

変革へのきっかけをつくる1年になると。

【立野】

内容そのものが悪いとは思いますが、事業に対するPRがうまく機能していないとは強く感じています。ロータリーがポリオ対策に長年取り組み、あと少しで撲滅というところまで来ていることなど、一般の方はほとんどご存じないでしょう。社会的イメージを高めるために、何ができるかを考えなくては。それと組織の活性化のためには若手の存在が重要で、若い方が入りたいと思える魅力づくりも課題です。



【佐野】

今回はガバナーとしてだけでなく企業人、そして人間・立野純三にも切り込みたいと思っています。そこでまず経営者としてのモットーからお聞きしたいのですが。

【立野】

二番煎じはしない、他社がやっていないことに取り組みもうという信念は通してきたつもりです。たとえばユニオン（の看板商品）といえばドアハンドルなのですが、僕は全く新しいジャンルとしてクロセットドアの販売に取り組みました。私が入社した当時既にドアハンドルでは実績のあった当社ですが、クロセットドアは全く未開の地。失敗もありましたが、それを乗り越えたことが自信につながった。成功体験がないから、先入観をもつことなく挑戦できたのかもしれない。一方でドアハンドルを売ることに慣れていた社員にとってはつらい経験だったと思いますが、挫折を乗り越えた人は素晴らしいセールスマンになりましたね。いずれにせよクロセットドアを日本に普及させたという自負が、私のバックボーンになったことは確かです。

【佐野】

立野ガバナーはこれまでも大阪JC理事長など様々な公職に就き、ボランティアにも携わってられました。



【立野】

思い出深いのは「セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン」ですね。私にとって、ボランティアの原点。大阪JCの周年事業で「愛の手基金」というものを創設したのですが、さらに国際的な貢献につなげようという話になり、日本JCを介して国際婦人福祉協会という団体とセーブ・ザ・チルドレン基金を日本に作るようになったのが1986年。初代理事長になってすぐ、わずか200万円の資金でフィリピンのギマラスという町に学校を建てました。今思えば掘建小屋みたいなものでしたが、竣工式で子供たちの喜ぶ顔に大変感動しまして、活動にのめり込む大きなきっかけとなりました。結局18年もの間理事長を務めました、良い経験になりました。

【佐野】

現在は日本建築材料協会の会長としてもご活躍です。建材協会といえば全国規模のイベントとして建築材料・住宅設備総合展(建材展)を開いています。

【立野】

2013年に会長に就任し現在2期目に入りました。建材展はこれまで2年に1度の催しだったのですが、去年から「KENTEN」として毎年開催することにしました。今年はおかげさまで展示数も増えました。目指すところはあくまで高く、ミラノサローネ(註・世界最大規模のデザインの祭典)。いつの日か大阪に人を呼び込めるような世界的な展示会にしたい。そのためにも佐野さんが会長を務められている大阪府建築士事務所協会を始め、建築界の他団体とも積極的に交流し連携したいと思っています。

【佐野】

まさに「大阪サローネ」ですね。ラビンドランRI会長もロータリーのイメージを高めるためにブランディングの重要性を訴えています、建築界もロータリーも、イメージ戦略に積極的に取り組むべき時期に来ていると強く感じました。大阪からそのきっかけづくりができることを期待したいと思います。ありがとうございました。